

## ラテンアメリカ前衛詩研究とその不満

安原 瑛治

---

### 0. はじめに

「ラテンアメリカ前衛詩」、そう聞いたとき、いったい何が思い浮かぶだろうか。「ラテンアメリカ」といえば「ブーム」、「前衛詩」といえば「ヨーロッパ」、そういう読者にとって、この術語は、なじみの薄いものかもしれない。しかし、この文学的現象を構成する固有名——ボルヘス、パス、ネルーダなど——はラテンアメリカ文学に不可欠な存在であるし、いまでも世界の文学の豊饒な一部でありつづけている。ボルヘスふうにいえば、それは、「緑ゆたかな永遠のイタカ *Ítaca de verde eternidad*<sup>1</sup>」なのである。

本稿が目的とするのは、ラテンアメリカ前衛詩をより十全に鑑賞するための、あらたな研究の切り口をしめすことである。そのため、以下では、まず、ラテンアメリカ前衛詩の文学史的評価を参照し、それにたいしてなされた先行研究を概観する。そして、先行研究のなかでも代表的な研究にあたるヴィッキー・ウンルー『ラテンアメリカの前衛運動——論争的邂逅の芸術』(*Latin American Vanguards: The Art of Contentious Encounters*, 1994)を分析し、ウンルー論の総合的な視点から漏れてしまう要素を指摘する。そのうえで、それを補完するための方途として、チリの詩人ビセンテ・ウイドブロ (Vicente Huidobro, 1893-1948) の環大西洋的な影響を看取する研究アプローチを提示する。

### 1. ラテンアメリカ前衛詩研究の展開、および問題点

#### 1-1. ラテンアメリカ前衛詩研究の展開

そもそも、ラテンアメリカ前衛詩の時代とは、いつを指すのだろうか。これには諸説あるが、たとえば、ロベルト・ゴンサレス・エチェバリアとエンリケ・プポ＝ウォーカーの編集によるケンブリッジ大学版『ラテンアメリカ文学史』は、1916年から1935年の間と説明している<sup>2</sup>。そして、この間の文学的達成の大きさは、否みがたいものだ。じっさい、ラテンアメリカ詩の著名な研究書であるサウル・ジュルキエビチ (Saúl Yurkiévich) 『新たなラテンアメリカ詩の創設者たち——バジェホ、ウイドブロ、ボルヘス、ネルーダ、パス』(*Fundadores de la nueva poesía latinoamericana : Vallejo, Huidobro, Borges, Neruda, Paz*, 1971) が20世紀ラテンアメリカ詩の「創設者」として論じるのは、タイトルのとおり、セサル・バジェホ (César Vallejo, 1892-1938, ペルー出身)、ビセンテ・ウイドブロ、ホルヘ・ルイス・ボルヘス (Jorge Luis Borges, 1899-1986, アルゼンチン出身)、パブロ・ネルーダ (Pablo Neruda, 1904-1973, チリ出身)、オクタビオ・パス (Octavio Paz, 1914-1998, メキシコ出身) の五人で、つまりはぜんいん前衛詩人である<sup>3</sup>。

それゆえ、ガブリエル・ガルシア・マルケス (Gabriel García Márquez, 1927-2014) やマリオ・バルガス・リョサ (Mario Vargas Llosa, 1936-) らが世界的に注目をあつめたラテンアメリカ文学「ブーム」以降、おもに 1980 年代から、前衛運動研究もしげん興隆した。この時期の代表的な研究としては、まず、ウーゴ・ベラーニ (Hugo Verani) 「イスパノアメリカの文学的前衛運動」(“Las vanguardias literarias en Hispanoamérica.”, 1981) やアルフレド・ボシ (Alfredo Bosi) 「ラテンアメリカ前衛運動の寓話」(“La parábola de las vanguardias latinoamericanas.”, 1991) があげられる。これらの特徴は、ラテンアメリカ各国の前衛運動の展開を、並列的に描出している点だ。また、これとは別な手法をとった先行研究に、ネルソン・オソリオ・T (Nelson Osorio T.) の「イスパノアメリカ文学における前衛主義の歴史的特徴づけのために」(“Para una caracterización histórica del vanguardismo literario hispanoamericano.”, 1981) とアンソロジー『イスパノアメリカにおける文学的前衛運動のマニフェスト、声明、論争』(Manifiestos, proclamas y polémicas de la vanguardia literaria hispanoamericana, 1988) の序文、そして、ヴィッキー・ウンルー『ラテンアメリカの前衛運動——論争的邂逅の芸術』などがある。これらの特徴は、ラテンアメリカ各国の前衛運動を総合し、それらにひろく共有された特徴を見出している点だ。とりわけウンルー『ラテンアメリカの前衛運動』は、その網羅性から、多く参照されている研究である。

## 1-2. ウンルー『ラテンアメリカの前衛運動』の問題点

ウンルー『ラテンアメリカの前衛運動』の特徴は、その総合的視座、そして、前衛運動の美学的要素への着目だ。文学におけるラテンアメリカの前衛運動を「大陸の現象 a continental phenomenon<sup>4</sup>」とよぶウンルーは、ラテンアメリカ全域と複数の芸術ジャンル(詩、演劇、小説、マニフェスト)を包括的にあつかい、そこに分け持たれた「活動の一形式 a form of activity<sup>5</sup>」を、美学的、社会的な視点から分析する。ラテンアメリカ全域を総合する視点をもつこと、そして、社会的コンテクストのみならず美学的要素に差異をもとめることは、ラテンアメリカ前衛運動の独自性をしめすうえで、ごくしげんなアプローチだ。しかし、結論からいうと、このアプローチはふたつの問題点をはらんでおり、その目的をじゅうぶんに果たしていない。これらの問題点は、ウンルーのアプローチの美学的、空間的特徴にそれぞれ対応している。

ウンルーの美学的アプローチについて、第一に問題なのは、ラテンアメリカ前衛運動を総合するという企図ゆえに、一種の還元主義をまぬかれていないことだ。なぜなら、そこで生まれた諸運動を「活動の一形式」として理解することは、それらに内包される美学的差異を捨象することにつながるからだ。このジレンマは、『ラテンアメリカの前衛運動』の随所にみられる。ウンルーは、分析する前衛運動のひとつひとつを、ラテンアメリカ的「活動の一形式」と差異的な社会的コンテクストが合わさったものとして理解しているが、それゆえに、ラテンアメリカ各国の前衛運動を個別化するのは、結局社会的コンテクスト

ということになってしまう。

また、ウンルーによれば、ラテンアメリカ前衛運動をその源であるヨーロッパ前衛運動から美学的に差異化するのには、この「活動の一形式」ゆえである。そしてこの「一形式」の理論的背景となっているのが、スペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセット (José Ortega y Gasset, 1883-1955) の案出した概念、「芸術の非人間化 la deshumanización del arte」である。オルテガ・イ・ガセットは、同名の論文 (1925) において、同時代の先鋭的な芸術潮流の特徴を、「非人間化」として指摘した。オルテガ・イ・ガセットのいう「人間的」ということは、「ミメーシス的」であることであり、「非人間的」ということは、「反ミメーシス的」ということである。「芸術の非人間化」内でもちられる比喻をつかうなら、従来の「人間的」な芸術はみる者を風景のみに集中させるのにたいし、新しい「非人間的」な芸術は、風景の手前にある窓じたいを意識させる<sup>6</sup>。ミメーシス的芸術を追求する芸術家は、「現実の無邪気な理想化 una ingenua idealización de lo real<sup>7</sup>」をほどこしてしまうのであり、かえって現実からじぶんをとおぎやしてしまう一方、新しい芸術の担い手は、ミメーシスを放棄し、「観念と事物との間には、つねに絶対的な距離がある entre la idea y la cosa hay siempre una absoluta distancia<sup>8</sup>」ことを認識し、作品を現実に従わせるのではなく、自立した存在として作り出す。それゆえ、新しい時代の詩人たちにとって、隠喩はレトリックとしての役割を離れ、「装飾 ornamento」ではなく「実体 sustancia」として存するのである<sup>9</sup>。ウンルーが指摘するとおり、「芸術の非人間化」は、異化効果のヴァリエーションとして理解できる<sup>10</sup>。

この概念をもとに、ウンルーは、ラテンアメリカ前衛運動の特徴として、1) 芸術と経験の再統合を志向したこと、2) 「非人間的」性質ではなく「人間的」性質を志向したこと、3) 異化効果がラテンアメリカ特有だという自己認識をもったこと、の三点をあげている<sup>11</sup>。しかし、これらの特徴は、ラテンアメリカ前衛運動特有の美学的特徴としては、あまり説得的ではない。一点目にかんしては、ウンルーは、アヴァンギャルド論の古典であるペーター・ビュルガー『アヴァンギャルドの理論』にならい、「非人間化」効果を芸術と生の乖離を解消する手段としてとらえなおしている。しかし、これはアヴァンギャルド全般に妥当する議論であり、つまりはヨーロッパ前衛運動の特徴でもある<sup>12</sup>。

また、二点目にかんしては、「人間的」として言い表される美学があいまいであり、かつときに食い違っている。じっさい、ウンルーも認めるとおり、「人間的」性質を称揚するラテンアメリカの作家、詩人たちのなかにも、オルテガ・イ・ガセット的「非人間化」に対抗する概念として「人間化」を構想した者もいれば、その文脈とは関係のないところで「人間的」芸術をとらえた者もいた<sup>13</sup>。たとえば、ウンルーは、前者に当たるメキシコの小説家、詩人のハイメ・トーレス・ボデ (Jaime Torres Bodet) が、オルテガ・イ・ガセットの「非人間化」論を批判し「人間化」を称揚したことを指摘している。ウンルーは、風景と窓の例をひきながら、以下のようにトーレス・ボデの美学を説明している。

しかし、オルテガと違って、トーレス・ボデの語り手は風景に対して枠を支持するというより、枠効果と己の生身としての物体の相互作用に注目している。それは、芸術と生の相互作用であり、相互作用を生みだす主体たる人間の立ち位置と活動である。<sup>14</sup>

すなわち、ここで、トーレス・ボデが「人間化」とよんでいるのは、作中の語り手による、芸術と生の関係にたいするメタフィクション的な洞察である。ウンルーはこの「自己内省的な語り手 the self-reflexive narrator<sup>15</sup>」をトーレス・ボデの特徴としているが、このトーレス・ボデ的「人間化」の定義は、「人間的＝ミメシス的」というオルテガ・イ・ガセット的な枠組みからすでに逸脱している。さらに、後者に当たる例としてウンルーがひくビセンテ・ウイドブロの詩「詩法」は、オルテガ・イ・ガセット的な意味でも、トーレス・ボデ的な意味でも、「人間性」を称揚していない。ウンルーは、ここに、ウイドブロの「芸術の人間化効果 art's humanizing effects<sup>16</sup>」を見出しているが、むしろウイドブロが主張しているのは、反ミメシス的かつ反身体的な芸術である<sup>17</sup>。以上にしめしたように、ウンルーのいう「人間的」美学の範疇にはその実対極的な思想が混在しており、ラテンアメリカの前衛運動を特徴づけるために必要な一貫性をもっていない。

三点目は、より詳述すれば、前衛芸術が特徴とした異化効果の契機として、ラテンアメリカのエキゾチズムが利用されたことを指している（この現象は『ラテンアメリカの前衛運動』第3、5章で論じられている）。ただ、これは先に述べた「美学的要素ではなく社会的コンテキストで差異化する」試みに該当するうえ、ウンルーじしんが述べているとおり、この試みはしばしばラテンアメリカとヨーロッパの芸術家たちの一種の共犯関係により遂行されていた<sup>18</sup>。換言すれば、三点目のしめす「ラテンアメリカ的なもの」は、社会的コンテキストであって、美学的要素ではない。以上の理由から、ラテンアメリカ前衛運動（本稿の射程では前衛詩）の独自性をしめすには、元来ヨーロッパ前衛運動を論じるために案出された「芸術の非人間化」を基準とするのではなく、べつな鍵概念をすえる必要がある。

ウンルーの空間的アプローチにかんする問題点は、ラテンアメリカ前衛詩を包括するさいに、ラテンアメリカのみを射程にいれている点である。これは、一見、当然に見えるかもしれない。しかし、第一次大戦期からスペイン内戦までのあいだ、多くのラテンアメリカの詩人たちがパリやマドリードへわたり、知的刺激をうけていたことを考えると、ラテンアメリカ前衛詩研究の射程をラテンアメリカで区切ってしまうことは、むしろ不自然である。じっさい、先にあげた「創設者」のうち、バジェホはパリに、ボルヘスはスペインに、ウイドブロはその両方の地に滞在した。先にのべた「前衛詩の時代」に、これらラテンアメリカの詩人たちがパリで文学的成功をおさめたことはなかったが<sup>19</sup>、スペインでのラテンアメリカ、スペイン双方の詩人たちの交流はさかんで、それはスペイン内戦期（1936-1939）にさらなる高まりをみせることになる<sup>20</sup>。よって、ラテンアメリカ前衛詩のより動的な像をえがくためにも、ラテンアメリカとスペインを包括する視点が必要だとい

える。換言すれば、「ラテンアメリカ前衛詩研究」は「スペイン語圏前衛詩研究」としてとらえなおされるべきである<sup>21</sup>。

また、このことは、社会的コンテクストに拠らないラテンアメリカ前衛詩（そしてスペイン語圏前衛詩）の独自性の探求に寄与する。なぜなら、「ラテンアメリカ」から離れることは、どうじに「旧植民地/旧宗主国」というポストコロニアル的枠組みから離れることをも意味するからだ。Kim Watson and Wilder (2019) がのべるとおり、「西洋/グローバル・サウス」という二項対立を前提とすることは、たとえ「グローバル・サウス」を再評価する意図であっても、むしろ、その枠組みじたいを強固にしてしまう<sup>22</sup>。それゆえ、肝要なのは、両者のあいだの流動的な関係を分析することで、この対立を脱構築することである。「グローバル・サウスの脱地方化 Deprovincializing the Global South<sup>23</sup>」とよばれるこの発想を取り入れることで、詩作品のもつ、よりふかい美学的な特徴の分析が可能となるだろう。

以上にのべたとおり、ウンルーの議論には、ふたつの理由から修正が可能である。まず、ラテンアメリカ前衛詩の独自性を個々の国の社会的要素に還元しないためにも、ラテンアメリカ前衛詩の「活動の一形式」内部の美学的差異をもとめることが必要である。さらに、より実態にそくしたラテンアメリカ前衛詩の展開を追い、かつポストコロニアルな二項対立にとらわれないその美学的な変遷を描出するためにも、ヨーロッパへわたった詩人たちの知的交流の跡を追わなくてはならない。

## 2. ウイドブロの大西洋的流通

それでは、こうした先行研究の限界をのりこえるには、どのような研究をすればよいのだろうか。かんがえられる答えは、ひとつではない。しかし、ここで注目したいのが、チリの詩人ビセンテ・ウイドブロである。なぜなら、ウイドブロの詩学は後続の詩人たちに受容されながら、美学的差異を内包するひとつの系譜を形成しているし、そして、その影響は、ラテンアメリカとスペインの前衛詩における連続性の証左でもあるからだ。

チリで詩作をはじめたウイドブロは、1916年、パリにわたる。パブロ・ピカソ (Pablo Picasso) やピエール・ルベルディ (Pierre Reverdy) ら前衛的芸術家から影響を受けたウイドブロは、「クレアシオニスモ creacionismo」という独自の作風を標榜し、詩集『四角い地平線』などを出版した。1918年、第一次大戦の戦火をのがれてマドリードへ移ったウイドブロは、ヘラルド・ディエゴ (Gerardo, Diego, 1896-1987)、ラファエル・カンシノス・アッセンス (Rafael Cansinos Assens, 1882-1964) やギジェルモ・デ・トーレ (Guillermo de Torre, 1900-1971) らスペインの詩人たちに熱狂的に受け入れられ、「ウルトラリスモ ultraísmo」という彼らの前衛運動の遠因となった。そして、「ウルトラリスモ」の一員でありそれを積極的に理論化しようとしたのが、のちのホルヘ・ルイス・ボルヘスである。1921年にアルゼンチンに帰国したボルヘスは、スペインの「ウルトラリスモ」への批判意識から、アルゼンチン版「ウルトラリスモ」を唱導するようになる<sup>24</sup>。

上にみたウイドブロの受容——Infante (2013) がウイドブロの「大西洋的流通 the transatlantic circulation<sup>25</sup>」とよぶもの——を分析するうえで、鍵になるのが、ウイドブロの詩学「クレアシオニスモ」である。なぜなら、「クレアシオニスモ」は、ウンルーが重要視する「芸術の非人間化」の系譜とは別な系譜をえがくことを可能にするからだ<sup>26</sup>。ウンルーは、ビュルガーの論にのっとり、「芸術の非人間化」作用が逆説的に芸術と生の統合をはたす、と主張する（本稿註12を参照）。しかし、ウイドブロの「クレアシオニスモ」——その定義は詩人のキャリアのなかで変化していくのだが——は、この構図から逸脱する詩学である。アポリネールの「文学的キュビズム」とよばれる作風に特徴づけられる『四角い地平線』などの初期作品群は、たしかに既存の意味での現実表象を放棄しているが、詩行に視覚性を導入することで「より真なる」現実表象を志向している点で、「非人間化」による「統合」をこころみているといえる。しかし、自律的な言語世界を構築した『赤道的』(Ecuatorial, 1918) や『突然』などの中期の作品群は、もはや「非人間化」を極限までおしすすめており、表象されるべき「現実」はそこに立ち現れない。オルテガ・イ・ガセットの風景と窓の比喩をふたたびもちいれば、中期ウイドブロの作品には、もはや風景も窓も存在せず、言語からなる反ミメシスの空間がただひろがっている<sup>27</sup>。「芸術の非人間化」とはことなり、かつウイドブロのなかでその定義が変遷していく「クレアシオニスモ」がスペイン語圏でいかに受容されたのかを探ることで、より複雑なスペイン語圏前衛詩の相貌がみえてくる。そしてその「複雑さ」とは、そのまま豊かさでもあるはずだ。

## 注

1. ボルヘスは「詩法」(“Arte poética”) で、芸術(とりわけ詩)を、こう定義している。「語り伝えによれば、オデュッセウスは驚異に倦み、/ 緑ゆたかな慎ましいイタカを望みみて / 懐かしさに泣いたという。芸術は驚異ではない、/ 緑ゆたかな永遠のあのイタカなのだ。」(“Cuentan que Ulises, harto de prodigios, / lloró de amor al divisar su Ítaca / verde y humilde. El arte es esa Ítaca / de verde eternidad, no de prodigios.”) Borges, *Poesía completa*, p. 150, 『創造者』179頁。日本語訳は、鼓直氏のものを使用したが、引用のさいに文脈にあわせて一部変更させていただいた。
2. 前衛詩の項目を担当したウーゴ・J・ベラーニによれば、ラテンアメリカ前衛詩の時代は、ピセンテ・ウイドブロの先駆的な詩集『水の鏡』(*El espejo de agua*) が出版された1916年にはじまったが(Hugo J. Verani, “The Vanguardia and its implications,” p. 114.)、1936年にスペイン内戦が勃発し、ネルーダをはじめそれまで実験的な創作をつづけていた詩人たちが政治的な作風に転換したために、突如として終わりをむかえた(Hugo J. Verani, “The Vanguardia and its implications,” pp. 136-37.)。もちろん、このことはその後前衛詩がまったく書かれなくなったことを意味するのではなく、後続の世代にも前衛詩人とみなせる文学者たちは数多くいる。

## 〈研究ノート〉

3. ただし、ボルヘスが実験的な詩作をしたのは、1920年代のことであり、その後中断期間を経て、定型詩などの伝統的な作風へと転換していった。Maier (1996) は、ボルヘスが20年代の作品群ですでに伝統への志向をしめしている、と指摘している。Maier, *Borges and the European Avant-Garde*, pp. 87-88. また、ネルーダは1930年代の『大地の住処』(*Residencia en la tierra*, 第一巻1933年, 第二巻1935年)において前衛的な作風を追求したが、スペイン内戦期に政治的イデオロギー色のつよい作風へと転換した。
4. Unruh, *Latin American Vanguards*, p. 11.
5. Unruh, *Latin American Vanguards*, p. 10.
6. Ortega y Gasset, *Obras completas*, pp. 357-58. 日本語訳は、神吉敬三氏のものを使用した。『オルテガ著作集 3』44頁。以下同様。
7. Ortega y Gasset, *Obras completas*, p. 376, 『オルテガ著作集 3』74頁。
8. Ortega y Gasset, *Obras completas*, p. 375, 『オルテガ著作集 3』73頁。
9. Ortega y Gasset, *Obras completas*, p. 374, 『オルテガ著作集 3』70頁。
10. Unruh, *Latin American Vanguards*, pp. 21-22.
11. Unruh, *Latin American Vanguards*, pp. 21-26.
12. ウンルーが要約するとおり、ビュルガーの論では、アヴァンギャルド芸術の「ショック」効果は、芸術作品が「芸術」という既存の体制を逸脱し、ひとびとの生との乖離を解消することに寄与する (Unruh, *Latin American Vanguards*, p. 22. ビュルガー『アヴァンギャルドの理論』28, 81頁)。もっとも、この「統合」は、虚構的な目標であって、それが究極的に果たされることはない。なぜなら、「芸術」から逸脱する芸術は、その芸術性が認識されると、すぐさま「芸術」に吸収されてしまうからだ。このニヒリズムを、ビュルガーは「ネオアヴァンギャルド」と呼んだが (ビュルガー『アヴァンギャルドの理論』82-85頁)、これをオルテガ・イ・ガセットがすでに示していた点もまた、このふたりの論者の親近性をしめしているといえるだろう。スペインの哲学者はこういつている。「なぜならば、観念は、事実上、非現実的なものであり、それを現実と看做すことは、とりもなおさず理想化することであり、邪気なく偽造することだからである。観念にその非現実そのものの状態において生命を与えることは、いうなれば、非現実を非現実として現実化することなのである。(Porque ellas [ideas] son, en efecto, irrealidad. Tomarlas como realidad es idealizar -falsificar ingenuamente. Hacerlas vivir en su irrealidad misma es, digámoslo así, realizar lo irreal en cuanto irreal.)」(Ortega y Gasset, *Obras completas*, p. 376, 『オルテガ著作集 3』74頁) ここでいう「観念」とは主体が事物を認識したときにえるイメージだが、オルテガ・イ・ガセットが強調するのは、そのイメージとそれにもとづく芸術と、外在する事物との絶対的な懸隔である。ゆえに、本質的に「非現実」的な芸術作品は、「現実」として現実にあられることはできず、「非現実」という違和としてのみ、「現実」にあられるのである。
13. Unruh, *Latin American Vanguards*, pp. 23-24.
14. Unruh, *Latin American Vanguards*, p. 72. "But, unlike Ortega, Torres Bodet's narrator, rather than favoring the frames over the landscape, focuses on the interaction between the framing process and its raw material, that is, between art and life, as well as on the position and activity of the human subject who constructs the interaction."
15. Unruh, *Latin American Vanguards*, p. 72.
16. Unruh, *Latin American Vanguards*, p. 23.
17. ウイドプロは「詩法」のなかで、「どうして薔薇を歌うのか、おお、詩人たちよ！ / 薔薇を詩のなかに咲かせてみなさい ("Por qué cantáis la rosa, ¡oh Poetas! / Hacedla florecer en el poema")」という。つまり、指示対象から独立した自立したことを打ち立てることを、詩人の役割としてとらえている。また、以下の詩句では、肉体 / 知性という二項対立を提示し、後者を称揚している。「筋肉は吊られている、/ あたかも記憶のように、博物館に / しかし、それゆえに私たちの力が減じるわけではない。 / ほんとうの力とは / 頭にやどるものなのだ。 ("El

- músculo cuelga, / Como recuerdo, en los museos; / Mas no por eso tenemos menos fuerza: / El vigor verdadero / Reside en la cabeza.”」 Huidorbo, *Obra poética*, p. 391.
18. Unruh, *Latin American Vanguards*, p. 133. また、第一次大戦後のヨーロッパ側からの第三世界への関心の高まりは、ジェームズ・クリフォードが『文化の窮状』第4章でのべるとおり、ブルトンやバタイユらシュルレアリストたちの間の文化人類学への傾倒からみてとれる。
  19. バリでの成功にもっとも近づいたのは、ウイドプロだろう。なぜなら、『四角い地平線』(*Horizon carré*, 1917) や『突然』(*Tout à coup*, 1925) などの作品をフランス語で執筆し、戦略的にじぶんを発信したからである。しかしその詩作品および詩論が反響をえたとはいいがたく、Costa (1984) も、1920年代前半の講演ツアーは失敗に終わったとのべている (Costa, *Vicente Huidobro*, p. 85)。また、バジェホがいかにバリで疎外された存在だったのかは、Clayton (2011) 第5章にくわしい。
  20. Enjuto Rangel (2010) は、ラテンアメリカの前衛詩人たちのあいだで、19世紀にうまれたスペインへの対抗意識が、スペイン内戦期に疑問にふされ、「あらたな形の団結 a new form of solidarity」が共有された、とのべている。Enjuto Rangel, “Huidobro’s Transatlantic Politics of Solidarity and the Poetics of the Spanish Civil War,” pp. 15-16.
  21. 「スペイン語圏前衛詩」という集合は、「ヨーロッパ前衛詩」と区別できるのかと問う向きもあるかもしれない。しかし、ヨーロッパ前衛運動のなかでも、スペインは後発地域である (ポッジョーリはこのことを、スペインの工業化の遅れが原因だとしている、ポッジョーリ『アヴァンギャルドの理論』、136頁)。また、本稿で後述するとおり、スペインの前衛運動「ウルトラリスモ」はピセンテ・ウイドプロの多大な影響下で生まれているため、ラテンアメリカとスペインの前衛詩を一体として捉えることは可能だろう。なお、本研究とは異なる仕方で大西洋における前衛運動をとらえる研究に、Lori Cole. *Surveying the Avant Garde*. (2018) がある。Cole (2018) は、フランス、スペイン、北米、ラテンアメリカを一体としてとらえている。ただし、雑誌アンケートへの返答から当時の前衛運動の当事者たちがいかに自己を規定していたのかを探るといふ、かなりスペシフィックな切り口を採用しているため、具体的な詩作品から美学的特徴を分析する本研究とは関心を異にする。
  22. Kim Watson and Wilder, Introduction, pp. 12-13.
  23. Kim Watson and Wilder (2019) がのべるとおり、この傾向の代表的な著作として、ガヤトリ・スピヴァク『ある学問の死』(2003) などがあげられる (Kim Watson and Wilder, Introduction, p. 14.)。脱一國境的ヴィジョン「惑星思考 planetary thought」をかかげる同書は、その実践の一例として、「われわれのアメリカ (ラテンアメリカ)」をとらえたキューバの詩人ホセ・マルティ (José Martí, 1853-1895) をあげているために (スピヴァク『ある学問の死』、156-165頁)、本研究にとって示唆的である。
  24. スペイン版「ウルトラリスモ」の詩人たちのウイドプロ受容にかんしては、たとえば Díaz de Guereñu (1992) にくわしい。とりわけヘラルド・ディエゴにかんしては、Silverman (2017) 第4章が、ウイドプロの美学を批判的に受容した過程を詳述している。また、ボルヘスの初期詩作品にみられるスペイン版「ウルトラリスモ」との美学的差異は、以下を参照のこと。Maier, *Borges and the Euroean Avant-Garde*, pp. 49-53.
  25. Infante, *After Translation*, p. 54. Infante (2013) は、大西洋における前衛詩の流通と影響の関係をテーマとした研究である。この研究を特徴づけているのは、長大な時代スパン (1920～1980年代) を対象とし、複数の語圏 (英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語) を横断するその壮大なアプローチである。しかし、翻訳を介した時代を超えた影響関係を主にあつかっているため、同一語圏内の直接的な影響関係を論じる本研究とは方向性を異にする。
  26. Osorio (1981) もまた、具体的な方針をしめしてはいないものの、ラテンアメリカ前衛運動をヨーロッパ前衛運動 (未来派、シュルレアリスムなど) と差異化するためにも、「クレアシオニスモ」と「ウルトラリスモ」の研究が重要となりうる、とのべている。Osorio, “Para una caracterización histórica del vanguardismo literario hispanoamericano,” p. 228. ただし、「ウルトラリスモ」を研究することがスペインを研究対象にいれることを意



味し、必然的に「ラテンアメリカ前衛運動研究」の射程を超えることには留意すべきである。

- 27.『赤道的』を境に変化するウイドプロの作風にかんしては、以下の別稿にて詳述した。Yasuhara, “El alejamiento de la realidad: el cambio estético en *Ecuatorial* de Vicente Huidobro.”

#### 参考文献

- Borges, Jorge Luis. *Poesía completa*. Random House Mondadori, 2013.
- Bosi, Alfredo. “La parábola de las vanguardias latinoamericanas.” *Las vanguardias latinoamericanas: Textos, programáticos, y críticos*, edited by Jorge Schwartz, translated by Estela dos Santos, Cátedra, 1991, pp. 13-24.
- Clayton, Michelle. *Poetry in Pieces: César Vallejo and Lyric Modernity*. U of California P, 2011.
- Cole, Lori. *Surveying the Avant-Garde: Questions on Modernism, Art, and the Americas in Transatlantic Magazines*. Penn State UP, 2018. *Project Muse*. muse.jhu.edu/book/59123.
- Costa, René de. *Vicente Huidobro: The Careers of a Poet*. Clarendon P, 1984.
- Díaz de Guereñu, Juan Manuel. “Ultraístas y creacionistas: midiendo las distancias.” *Gerardo Diego y la vanguardia hispánica*, edited by José Luis Bernal, U de Extremadura, 1992, pp. 157-180.
- Enjuto Rangel, Cecilia. “Huidobro’s Transatlantic Politics of Solidarity and the Poetics of the Spanish Civil War.” *Hispanic Issues On Line* 6, 2010, pp. 14-35. *U of Minnesota*. cla.stg.umn.edu/sites/cla.umn.edu/files/hiol\_06\_01\_enjutorangel\_huidobros\_transatlantic\_politics\_of\_solidarity.pdf. Accessed 1 Aug. 2020.
- Huidobro, Vicente. *Obra poética*, edited by Cedomil Goic, ALLCA XX, 2003.
- Infante, Ignacio. *After Translation: The Transfer and Circulation of Modern Poetics Across the Atlantic*. Fordham UP, 2013. *Project Muse*. muse.jhu.edu/book/22217.
- Kim Watson, Jini, and Gary Wilder. Introduction. *The Postcolonial Contemporary: Political Imaginaries for the Global Present*, edited by Jini Kim Watson, Fordham UP, 2018, pp. 1-29. *Project Muse*. muse.jhu.edu/book/59091.
- Maier, Linda S. *Borges and the European Avant-garde*. Peter Lang, 1996.
- Ortega y Gasset, José. *Obras completas*, vol. 3, 7th ed., Revista de Occidente, 1966.
- Osorio T., Nelson. “Para una caracterización histórica del vanguardismo literario hispanoamericano.” *Revista iberoamericana*, vol. 47, no. 114-15, 1981, pp. 227-54. *revista-iberoamericana.pitt.edu/ojs/index.php/Iberoamericana/article/view/3623/3796*. Accessed 1 Aug. 2020.
- . Prólogo. *Manifestos, proclamas y polémicas de la vanguardia literaria hispanoamericana*, edited by Nelson Osorio T, Biblioteca Ayacucho, 1988, IX - XXVIII.
- Silverman, Renée M. *Mapping the Landscape, Remapping the Text: Spanish Poetry from Antonio Machado’s Campos de Castilla to the First Avant-Garde (1909-1925)*. U of North Carolina P, 2018. *Project Muse*. muse.jhu.edu/book/56858.
- Unruh, Vicky. *Latin American Vanguard: The Art of Contentious Encounters*. U of California P, 1994.
- Verani, Hugo. “Las vanguardias literarias en Hispanoamérica.” *Las vanguardias literarias en Hispanoamérica: Manifestos, proclamas y otros escritos*, edited by Hugo Verani, 3rd. ed., Fondo de Cultura Económica, 1995, pp. 9-50.
- Verani, Hugo J. “The Vanguardia and its implications.” *The Cambridge History of Latin American Literature*, edited by González Echevarría, Roberto, and Enrique Pupo-Walker, vol. 2, Cambridge UP, 1996, pp. 114-37.
- Yasuhara, Eiji. “El alejamiento de la realidad: el cambio estético en *Ecuatorial* de Vicente Huidobro.” *Hispanica* 64 (forthcoming).
- Yurkiévich, Saúl. *Fundadores de la nueva poesía latinoamericana: Vallejo, Huidobro, Borges, Neruda, Paz*. Barral, 1971.

- ウイドプロ、ビセンテ『クレアシオニスムの詩学：ラテンアメリカのアヴァンギャルド』鼓宗編訳、関西大学出版部、2015年。
- 『マニフェスト——ダダからクレアシオニスムへ』鼓宗訳、関西大学出版部、2013年。
- オルテガ・イ・ガセット、ホセ『オルテガ著作集 3』神吉敬三訳、白水社、1970年。
- クリフォード、ジェイムズ『文化の窮状——二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信、慶田勝彦他訳、2003年、人文書院。
- スピヴァク、G.C.『ある学問の死——惑星思考の比較文学へ』上村忠男、鈴木聡訳、みすず書房、2004年。
- 鼓宗「サンティアゴからパリへ——1917年の詩作におけるビセンテ・ウイドプロのフランス語使用」『関西大学外国語学部紀要』第3号、2010年、57-71頁。関西大学学術デポジトリ。hdl.hadle.net/10112/2636.
- 『『水鏡』におけるビセンテ・ウイドプロの創造主義的手法の展開』『関西大学外国語学部紀要』第1号、2009年、41-52頁。関西大学学術デポジトリ。hdl.hadle.net/10112/764.
- 「スペイン前衛詩の始まり：ビセンテ・ウイドプロ『北極の詩』」『関西大学東西学術研究所紀要』第51号、2018年、A65-A78頁。関西大学学術デポジトリ。hdl.hadle.net/10112/16148.
- 「世界終末の詩：ビセンテ・ウイドプロ作『赤道儀』」『関西大学東西学術研究所紀要』第45号、2012年、179-89頁。関西大学学術デポジトリ。hdl.hadle.net/10112/7306.
- 「前衛詩人たちの論争——ビセンテ・ウイドプロ『水鏡』発行年の真偽をめぐって——」『関西大学外国語教育研究』第10号、2005年、67-78頁。関西大学学術デポジトリ。hdl.hadle.net/10112/1456.
- 「ビセンテ・ウイドプロと1910年代のスペイン前衛詩」『関西大学外国語教育研究』第8号、2004年、57-74頁。関西大学学術デポジトリ。hdl.hadle.net/10112/1479.
- ビュルガー、ペーター『アヴァンギャルドの理論』浅井健二郎訳、ありな書房、1987年。
- ボッジョーリ、レナート『アヴァンギャルドの理論』篠田綾子訳、晶文社、1988年。
- ボルヘス、ホルヘ・ルイス『創造者』鼓直訳、岩波書店、2009年。